

ある自閉症スペクトラム障害者における他者とのユーモア共有 —心理劇的ロールプレイングにおけるユーモア表出を促す指示的・受容的かかわり—

永瀬 開・田中 真理
東北大学大学院教育学研究科

要約

本稿の目的は、他者とのかかわりに不安を抱いている自閉症スペクトラム障害者である A がユーモア共有を行うまでのプロセスを明らかにすることである。本稿では A が参加している心理劇的ロールプレイングにおける A のユーモア共有した場面から検討を行った。検討の結果、ロールプレイの開始前に A は社会的な場面に不安を感じていたものの、スタッフに指示された内容のユーモア表出を行い、ユーモア共有を行ったことをきっかけに、自発的なユーモア表出を行い、社会的場面における不安が軽減したというプロセスが示された。こうした A のユーモア表出について、心理劇的ロールプレイングにおけるスタッフの指示的かかわりと受容的なかかわりの 2 つを組み合わせを行ったことが影響していることが示唆された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害 ユーモア共有 心理劇的ロールプレイング

I. 自閉症スペクトラム障害者における他者との関係とユーモア共有の困難さ

自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD)は、社会的相互交渉の質的障害、コミュニケーションの質的障害、想像力の障害及び、反復的・限局的行動を特徴とする広汎で連続した臨床群である(Wing, 1996)。こうした特徴を有する ASD 者は青年期において他者への関心が高まる一方で(辻井, 2004)、その障害特性から他者との関係において不適応状態を示すことが指摘されている。Klin, Saulnier, Sparrow, Cicchetti, Volkmar & Lord(2007)は、7歳から18歳までの ASD 者を対象に、社会性、コミュニケーション、日常生活の領域における適応状態を測定する Vineland Adaptive Behavior Scale を用いて各領域と年齢との相関について検討したところ、年齢が高まるにつれて社会性の領域において不適応の得点が高まることを示した。この結果から、特に思春期・青年期において、他者との関係において不適応状態に至る傾向にあると考えられる。またこうした他者との関係における不適応状態は、周囲の人からの叱責やいじめにつながり、ASD 者の自尊心や自己評価にネガティブな影響を与えることも推察される。そのため、他者との関係における不適応状態に対して臨床的に介入を行うことは、彼・彼女らの他者との関係における不適応状態を改善するだけでなく、彼・彼女らの自尊心や自己評価にポジティブな影響を与えることが考えられる。

こうした ASD 者の他者との関係における不適応状態を改善する一助となる視点として、他者とのユーモアの共有(以下ユーモア共有)が挙げられる。ユーモアとは、刺激の評価をきっかけに生起する一過性の愉悦や愉快さの情動体験だと定義される(Nomura & Maruno, 2011)。ユーモアには、精神的ストレスの緩和(葉山・櫻井, 2005; 塚脇・深田・樋口, 2011)や、ナチュラルキラー細胞の活性化(西田・大西, 2001)などの個人の心身の健康状態を保つ効果だけではなく、他者と共有することで他者との関係にポジティブな影響を与えるという社会的な効果も有していることが示されている。Fralely & Aron(2004)は、初対面の2人組に対して、ユーモア体験するような課題を共に行ったグループと、ユーモア体験を伴わない統制課題を共に行ったグループとで事前と事後の親密度を測る質問紙の結果を比較したところ、ユーモア体験をともに行ったグループの互いの親密度が高くなかった事を明らかにした。このことから、ユーモア共有には、他者との関係を円滑にするという効果があることが明らかになったと考えられる。しかしながら、ASD 者のユーモア共有について、三橋(2010)は、ASD 者がユーモア共有に困難さを有し、孤立感を深めていることを報告している。このことから、ASD 者において、ユーモア共有における他者との関係を円滑にする効果が発揮されていないと考えられる。そのため、ASD 者を対象としたグループワークにおいて、ASD 者のユーモア共有を促す取り組みがなされてきた。

II. ASD 者におけるユーモア共有を促す支援と心理劇的ロールプレイング

これまで ASD 者を対象としたグループワークにおけるユーモア共有を促す取り組みとしては、ASD 者が他のグループメンバーの前で、他者にユーモアを体験させる言動を行う(以下、ユーモア表出)という取り組みが中心になされてきた。

Van Bourgondien & Mesibov(1987)は、青年期・成人期の ASD 者(Age : 18-37 歳、FIQ : 71-101)を対象としたグループワークにおいて、他のメンバーの前でユーモア表出を行うという「ジョークタイム」における ASD 者の様子を報告した。その報告において、ASD 者は、それぞれ他のメンバーの前でユーモア表出を行ったこと、他のグループメンバーによって表出されたジョークに、ユーモア共有をしていた様子を報告している。また Mesibov & Stephens(1990)は、青年期・成人期の ASD 者 11 名(Age : 18-45 歳、FIQ : 57-94)を対象としたグループワークにおいて、Van Bourgondien & Mesibov(1987)で行われたジョークタイムを設けた実践について報告した。その実践の中で Mesibov & Stephens は、グループメンバーに聴取したグループメンバーの人気とそのメンバーのおもしろさとの間に正の相関があることを明らかにした。このことから、グループワークの中で行われたユーモア表出によって、他のメンバーとのユーモア共有が促され、グループメンバー同士の関係を良好にすることを示唆するものであると考えられる。

また本邦においても、永瀬・田中(2012)が、青年期の ASD 者を対象としたグループワークにおいて、ある青年期の ASD 者の他のグループメンバーの前でユーモア表出を行っ

た活動について事例報告を行った。活動の当初 A は、他者を傷つける内容のユーモア表出を行っていたが、活動を行っていくにつれて、A がユーモア表出の内容が他者を傷つける内容かどうかを考慮するような行動が増加したことを報告した。この事例では、こうしたユーモア表出の変容について、グループのスタッフが A のユーモア表出の内容に「おもしろかった」「あまり面白くなかった」といったフィードバックをすることが影響していることを考察した。このことは、グループスタッフのかかわりが、ユーモア表出する際の ASD 者の他者理解を変容させる可能性を指摘したものであると考えられる。ユーモア表出時の他者理解は社会的な場面におけるユーモア共有を考える上で重要な視点である。なぜなら、ユーモア表出には、その表出された内容によって、他者に不快な感情を与える場合があるためである(Kowalski, 2000)。そのため、こうした ASD 者のユーモア表出時の他者理解の変容を促した取り組みは、ASD 者のユーモア共有を促し、他者との関係における不適応を改善させる上でも価値のあるものだと考えられる。

ここまで、ASD 者のユーモア共有を促す取り組みについてレビューした。上述したユーモア共有を促す取り組みでは、ASD 者のユーモア表出を促すことを通して、ユーモア共有を促す取り組みが中心であった。しかしながら、これらユーモア共有を促す取り組みには、以下の課題があると考えられる。それは、グループワークの中でユーモア表出を行うこれらの活動が、限定的場面で行われていたという課題である。私たちが他者とユーモアを共有する場面は日常の社会的場面(ex 友人との会話など)であるが、グループワークのユーモア表出の活動はグループワークの中で、グループのスタッフからユーモア表出を促すように設定された限定的場面である。そのためこれらの活動では日常の社会的場面におけるユーモア共有までは扱えない。特に日常の社会的場面におけるユーモア表出は、いつユーモア表出を行うのかという「表出のタイミング」や、どのような人に対してユーモア表出を行うのかという「表出の対象」、そしてどのような内容のユーモア表出を行うのかという「表出の内容」など、グループワークのような限定的場面に比べて、自由度が高いユーモア表出を行う必要がある。しかしながら、日常の社会的場面で ASD 者のユーモア表出とユーモア共有を促すことは非常に困難でもある。なぜなら、上述したようにユーモア表出にはその内容によって他者を傷つける場合があるため(Kowalski, 2000)、日常の社会的場面においてユーモア表出を行うことによって、他者との関係が悪化することにつながる可能性があるためである。そのため、ASD 者の日常の社会的場面におけるユーモア共有を促す取り組みとしては、より日常の社会的場面に近いが、他者を傷つける恐れが無いようにコントロールされた状況の中でユーモア表出を促すことが求められる。

これらをふまえ本稿では、ASD 者を対象とした心理劇的ロールプレイング(Psycho-Dramatic Role Playing: 以下 PDRP)グループにおける、ユーモア表出とユーモア共有を促す取り組みについて、ある ASD 者の PDRP での事例から報告する。PDRP とは、個人の内面の分析を主とした心理劇に基盤を置きながらも、社会的場面や教育場面な

ど、より広い範囲での場面を取り上げながら、参加者一人一人の成長を引き出すことに主眼が置かれたロールプレイングであり、生活上の問題の場面に対して、単に言語的な表現だけでなく、即興的・自発的に行動的に役割を演じることによって、問題の解決の手がかりを見つける技法である(台, 1986)。そのため、PDRP で見られたユーモア表出やユーモア共有は、従来のグループワークのような限定的な場面に比べて、より日常の社会的場面に近い場面において見られるものだと考えられる。また PDRP は参加者の自発性や創造性を最大限に認めそれに沿いながら場面を作り上げるため、参加者本人が日常の社会的場面で抱きながらも表現できなかった自発的な行動が、語り、表情、姿勢、動作などで認められる特徴を有している(高原, 2012)。そのため、日常の社会的場面に苦手さを持ち、ユーモア表出やユーモア共有の経験が少ない ASD 者の自発的なユーモア表出を促す上で、PDRP は有効な取り組みであると考えられる。本稿では、PDRP に参加している ASD 者、A のユーモア表出とユーモア共有に焦点をあて、A のユーモア表出とユーモア共有を促した背景について、グループスタッフのかかわりから考察を行う。

Ⅲ. A が PDRP の中で示したユーモア表出と共有の様子

事例 A は自閉症スペクトラム障害圏の一つである広汎性発達障害と診断を受けた大学生の男性(CA : 23 歳; FIQ : 127)である。A は高校時代から仲間とうまくなじめず、社会的場面に不安を抱えていた。事例 A が参加した PDRP グループは、A を含めた青年期の ASD 者 9 名のグループメンバーと心理士・大学院生 9 名のスタッフの計 18 名によって構成されている。スタッフはグループの進行を行うディレクター(以下 Dir)と、Dir の進行を補助する補助自我(以下 AE)を行った。以下、ある 1 つのセッションにおける A が PDRP の中でユーモア表出を行うまでの場面とスタッフの指示的かかわり(a)と非自発的ユーモア表出とユーモア共有を実際に行った場面とスタッフの受容的かかわり(b)、自発的ユーモア表出とユーモア共有を実際に行った場面とスタッフの受容的かかわり(c)の 3 つの場面を報告する。エピソード中の「」は A 及び、グループメンバーの発言、<>はスタッフの発言を表している。なお PDRP においてみられたなお事例はプライバシー保護のため、本質を損なわない範囲で一部変更している。

【a : A のユーモア表出に至るまでの場面とスタッフの指示的かかわり】

このセッションのテーマは、A が高校時代の友人たちと再会し、一緒にご飯を食べるという場面であった。まず、再会した友人たちとファミレスに入室し、そこで友人たちと会話を行った。会話の内容としては、高校の時と比べて、大学に入って A の容姿が変わったこと(髪を短くしている、ピアスをしている、服装がおしゃれになっている)に友人たちが驚くという内容であった。RP 後に A に感想を尋ねると、「B(友人役を行ったスタッフ)の演技がうまかったと思います。」という発言を行ったり、Dir が「<A さん、場面の中ですごい変わったねって言われましたけど、どうでしたか?>と質問すると、

①Aは「もうちょっと(うまく)反応したかったです。」と返答した。その後上述した場面についてAの役をC(Aの友人役の別のグループメンバー)に取ってもらい、Aにはその場面を見てもらうミラー¹⁾の場面を行った。ミラーの場面を見た後のAは、Dirがくもつとこういう風に言えたらよかったなとか、何か話したかったな～というのがありますか?と質問すると、②Aは「そうですね・・・。自分が言われ続けた時にぼーっとしたことがあったのでそこでツッコミをいれたいなー、と」と返答する。そこでDirが次の場面で、Aがうまく会話ができる場面を行うことを提案する。

その後うまく会話ができる場面に入る前に、どのように会話をするかということAとグループメンバーとスタッフで話し合う。話し合いの中で、Aが髪を短くしたこと、ピアスをしたこと、服装がおしゃれになったことを尋ねられた時に、③ユーモア表出を行うことで返答することを決め、髪を短くしたことに対しては、『風邪をひいたから』、ピアスをしたことに対しては、『足を速くするため。』、服装がおしゃれになったことに対しては、『ファッション雑誌を一日9時間読んだ。』と返答することにしてロールプレイングを行った。

このAがユーモア表出に至るまでの場面において、下線部(1)のAが自身の他者とのかわりに対して、「もうちょっと(うまく)反応したい」と発言していることから、うまく他者とかかわることに対する高い動機づけを抱えていることが示唆された。また下線部(2)においては、「自分が言われ続けたときに、ぼーっとしたことがあったので、ツッコミをいれたいなー」という発言が見られていた。この発言における「ツッコミ」という単語をAが自発的に表出したことから、A自身がユーモアを他者と共有することによって、他者とうまくかかわることができることを認識していることもうかがわれた。この場面でグループスタッフは、こうしたAの発言を受けて、下線部(3)に見られるAにユーモア表出を会話で行うことと、具体的な「表出の内容」を伝えるという、Aが取るべき行動を伝え教える指示的なかかわりを行った。

【b:非自発的ユーモア表出とユーモア共有を行った場面とスタッフの受容的かかわり】

ここでは、実際に(a)で行ったAが友人たちと再会して一緒にご飯を食べる場面の続きの場面で、Aがユーモア表出を行う場面を行った。下線部(4)(5)(6)が、Aがユーモア表出を行った場面である。

B(Aの友人役のスタッフ)「いやでもAはすごく変わったよね。」>B<ピアスとかね>と話題を進める。④B<Aは何でピアスにしたの?>と質問すると、Aがはにかみながら「足が速くなるかと思って」と答える。B<そんなわけねーだろ!関係ないじゃん>と膝のあたりを叩いて笑顔でつつこむ。Aは笑顔。⑤B<他には、髪ですよ。なんで髪を短くしたの?>と尋ねると、Aはわざとらしくせき込む仕草をする。B<何?何?風邪引いたの?確かにね～風邪をひいたときには髪を短く・・・ってばか!全然関係ないじゃん。Aが何かおもしろくなってるんだけど。>D(Aの友人役のスタッフ)<A、す

ごくおしゃれになったよね！俺ぜんぜんおしゃれになれないんだけど、どうやっておしゃれになったの？>と質問すると、(6)Aは「毎日ファッション雑誌9時間読んだ」と答える。D<おお～読めないよ。そんなに毎日。>と言い、BとCとDが笑う。Dirが手を叩いて場面が終了する。この場面が終わった後に、Dirがくなんかすごい面白かったですけど、Aさんの確にアドリブを交えながら、返しましたね>と聞くと、Aは「楽しかったです。」と答えた。それを受けてBも<楽しかったです。>と発言した。

このAがユーモア表出とユーモア共有を行った場面において、Aは下線部で示した3つのユーモア表出を行っていた。下線部(4)の「表出の内容」は、aの場面でスタッフが指示的に提案を行った「表出の内容」であった。また下線部(6)の「表出の内容」についても同様に、aの場面でスタッフが指示的に提案を行った「表出の内容」であった。そのため、aの場面で行ったスタッフの指示的なかかわりがAのユーモア表出を促したことがうかがわれる。またそれだけでなく、下線部(5)のユーモア表出は、スタッフの指示的に提案を行った内容にAがジェスチャーを自発的につけて表出したものであった。この下線部(5)の場面はAの自発的なユーモア表出が見られた場面だと考えられた。

またスタッフはAが行ったユーモア表出に対して、笑顔を見せたり、ツッコミを入れるといった、Aのユーモア表出に対してポジティブな反応を返す、という受容的なかかわりを行い、それを受けて下線部(4)のように、Aが笑顔を見せる様子も見られた。

【c：自発的ユーモア表出とユーモア共有を行った場面とスタッフの受容的なかかわり】

ここでは、bの場面の後、再会した高校時代の友人たちと別れる場面を行った。以下は食事をしたお店の外に出て、別れる場面である。

B(友人役のスタッフ)<楽しかったね。>と言い、全員で店を出る。B<久々に会うのいいね。>と話す。B<でも一番はAかな。>と言うと、(7)Aは笑顔でわざとらしく「じゃあ、俺、行っちゃうわ。」と遠くを指さしながら歩いていく仕草をする。B<行っちゃうの？そんなわけないだろ！>とツッコミをする。その場にいたBC(友人役のグループメンバー)D(友人役のスタッフ)が一斉に笑い、Aも笑顔であった。Aが「じゃあ、そろそろ。また会おう」と解散を促し、輪になっていたメンバーが散り散りに解散する。Dirが手をたたき、場面が終了する。セッション後のAの感想シートにおいては、
「この部屋に入る前まで、なんとなく気が進まなかったが、みなさんのおかげで会話に溶け込めたので、社会的不安が薄くなった。」という記述を行っていた。

この下線部(7)に見られるAがユーモア表出とユーモア共有を行った場面において、Aはここでの行動を自発的に行っていた。Aがこの行動を笑顔で行っていたこと、他のグループスタッフやメンバーが笑った際も笑顔であったことから、Aが行ったこの行動はユーモア表出であったと考えられる。この下線部(7)で見られたユーモア表出は、ロールプレイ前の事前のやりとりで「表出のタイミング」や「表出の対象」、「表出の内容」をスタッフが事前に伝え教えるといった指示的なかかわりを行うことなく見られた行動であること

から、自発的に行ったユーモア表出であったと考えられる。また A が感想シートにおいて「社会的不安が薄くなった」と記述したことから、ユーモア表出とユーモア共有を行ったことによって、他者とのかかわりに対する不安が軽減されたことがうかがわれた。

また A の自発的なユーモア表出に対して、グループスタッフはツッコミを入れるという受容的なかかわりを行った。そして受容的なかかわりを受けた A から笑顔が見られる様子も見られた。

IV. ユーモア共有とユーモア表出を促す PDRP における取り組みの可能性と今後の課題

ここまで、ASD 者を対象にしたユーモア共有とユーモア表出を促す PDRP における取り組みについて、事例 A に対するグループスタッフのかかわりから検討を行った。この事例において A は当初、友人たちとの会話にうまく参加できていないことを認識し、他者との関係でうまく振る舞いたいという高い動機づけを抱いている状態であった。その後グループスタッフの方からユーモア表出を行うことと、「表出の内容」を伝え教える指示的にかかわりを行うことで、A はグループスタッフから提案されたユーモア表出(非自発的なユーモア表出)を行った。また A の非自発的なユーモア表出に対して、グループスタッフがポジティブな反応を返す、受容的なかかわりを行うことで、A が「表出のタイミング」「表出の対象」「表出の内容」を自ら考えたユーモア表出(自発的なユーモア表出)を示した。また A のユーモア表出をきっかけに、他のグループメンバーやスタッフが笑いあい、ユーモア共有を行うことを通して、A の持つ社会的場面に対する不安が軽減された様子も示された。A のユーモア表出とユーモア共有が見られた PDRP の場面は、高校時代の友人たちと再会したという架空の場面ではあるが、A の友人役のグループスタッフとメンバーが存在するという点において、従来のグループワークに見られた限定的な場面に比べて、日常の社会的場面に近い場面であったと考えられる。こうした場において、A が非自発的なユーモア表出から自発的なユーモア表出を行うという変化を示したことは、A にとって重要な変化であったと考えられる。以下 PDRP で見られた A のユーモア表出とユーモア共有の変化の背景について、グループスタッフの指示的にかかわりと受容的なかかわりの 2 つの視点から考察を行う。

まずグループスタッフの指示的なかかわりについて、本事例では実際に場面を行うのに先立って、Dir と AE の方から、ユーモア表出を行うことと、「表出の内容」について、指示的に伝えている。A は特に他者との関係においてどのように振る舞えばいいのか分からないという主訴を持っていたため、こうした具体的な振る舞い方を伝え教えるという指示的なかかわりは、A が他者との関係の中でユーモア表出を行うことの支えになったと考えられる。こうした ASD 者に対する指示的なかかわりは、ASD 児・者を対象とするソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)でも用いられており(Barry, Klinger, Lee, Paraldy,

Gilmore & Bodin, 2003)、一定の効果を上げることが示されている。今回のユーモア表出とユーモア共有を促す取り組みにおいても、どのようなユーモア表出を行うのかを伝える、指示的にかかわりが A の非自発的なユーモア表出を促したことが示唆された。

またグループスタッフの受容的にかかわりについて、本事例では A が非自発的に行ったユーモア表出を受け入れ、笑顔でツッコミを入れるという受容的にかかわりを行った。こうした受容的にかかわりは、A がユーモア表出を行うことへの抵抗感を軽減させたと考えられる。なぜなら A はその後、事前に伝えていた内容のユーモア表出にジェスチャーを加えたユーモア表出(2)や、自ら思いついたユーモア表出(4)を行っており、ユーモア表出への抵抗感が軽減された結果、こうした自発的ユーモア表出を行ったと考えられるためである。また PDRP は、様々な治療的支援により、日常のいつもの役割を機械的に演じるのではなく、自発性・創造性を発揮できるような場面が作られていくことが指摘されているため(高原, 2012)、PDRP というグループスタッフの指示した行動に必ずしも従う必要のない場が A の自発的なユーモア表出を促したと考えられる。

この自発的なユーモア表出は、一見上述した指示的にかかわりと対立したものであるとも捉えられうるが、本事例において、この2つのかかわりを組み合わせて用いることが重要であると考えられる。Barry et al.(2003)は、指示的にかかわりを中心とした SST で身に付けたソーシャルスキルが日常の社会的場面に般化しにくいことも指摘している。この背景には、SST で身に付けたソーシャルスキルが、ASD 者が自発的に行った行動ではなく、非常に限定的な場面でしか用いることができないためだと考えられる。そのため、PDRP において自発的なユーモア表出を促すためには、単に指示的にかかわりのみではなく、対象の行動に対する受容的にかかわりも合わせて考えていく必要があるだろう。そのため指示的にかかわりと、受容的にかかわりは、互いに独立して行われるのではなく、対象者の自発的なユーモア表出を引き出すために組み合わせて用いられるものであると考えられる。

しかしながら、本事例の課題として、こうしたかかわりが ASD 者全般に有効であるとは示すことができない点が挙げられる。本事例で取り上げた A は、社会的場面に不安を抱えるタイプであったが、ASD 者の中には他者に積極的にユーモア表出を行うタイプもいることが知られている(Werth, Perkins & Boucher, 2001; 永瀬・田中, 2012)。こうしたタイプは、自発的なユーモア表出を多く行うことが考えられる一方で、ユーモア表出における「表出のタイミング」や「表出の対象」、「表出の内容」を適切に調整することに困難さを抱えると考えられ、ユーモア表出がユーモア共有につながらない経験を多く重ねていることが推察される。そのため、こうしたタイプの ASD 者に対しては、PDRP において、受容的にかかわりを中心とした場面を行う、もしくはユーモア共有を行うことができなかった場面の PDRP を行うなどの取り組みを行うことが有効であると考えられる。しかしながら、PDRP における ASD 者のユーモア共有を扱った検討はほとんどなされておらず、

今後、知見の蓄積が必要だろう。

引用文献

- Asperger, H. (1944). Die 'autistischen psychopathen' im Kindesalter. *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten*, 117, 76-136. 詫間武元(訳) (1993) 小児期の自閉的精神病質 児童青年精神医学とその近接領域, 34, 2, 180-197; 34, 3, 282-301.
- Barry, T.B., Klinger, L.G., Lee, J. M. Palardy, N., Gilmore, T. and Bodin, S. D. (2003). Examining the Effectiveness of an Outpatient Clinic-Based Social Skills Group for High-Functioning Children with Autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 33, 6, 685-701.
- Fraley, B. and Aron, A. (2004). The Effect a Shared Humorous Experience on Closeness in Initial Encounters. *Personal Relationship*, 11, 61-78.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2005). ユーモアのストレス緩和に関する研究動向. 筑波大学心理学研究, 30, 87-95.
- Klin, A., Saulnier, C.A., Sparrow, S.S., Cicchetti, D.V., Volkmar, F.R. and Lord, C. (2007). Social and Communication Abilities and Disabilities in Higher Functioning Individuals with Autism Spectrum Disorders: The Vineland and the ADOS. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37, 748-759.
- Kowalski, R. M. (2000). "I was Only Kidding!" : Victims and Perperators' Perceptions of Teasing, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 231-241.
- Mesibov, G.B.. and Stephens, J. (1990). Perceptions of Popularity Among a Group of High-Functioning Adults with Autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 1, 33-43.
- 三橋真人 (2010). アスペルガー症候群の人のユーモア理解のしづらさについて. 笑い学研究, 17, 108-114.
- 永瀬 開・田中真理 (2012). ある自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア表出の特徴 -ユーモア表出時の他者理解の特徴から-, 東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報, 12, 79-87.
- 西田元彦・大西憲和 (2001). 笑い と NK 細胞活性の変化について. 笑い学研究, 8, 27-33.
- Nomura, R. and Maruno, S. (2011). Constructing a Coactivation Model for Explaining Humor Elicitation. *Psychology*, 2, 5, 477-485.
- 台 利夫 (1986). ロールプレイング. 日本文化科学社.
- 高原朗子 (2012). 発達障害児の生涯支援 社会への架け橋「心理劇」. 九州大学出版会.
- 辻井正次 (2004). 広汎性発達障害のこどもたち - 高機能自閉症・アスペルガー症候群をやるために -. ブレーン出版.
- 塚脇亮太・深田博巳・樋口匡貴 (2011). ユーモア表出が表出者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程. 実験社会心理学研究, 51, 1, 43-51.
- Van Bourgondien, M.E. and Mesibov, G.B. (1987). Humor in High-Functioning Autistic Adults. *Journal of Autism Developmental Disorders*, 17, 3, 417-424.
- Werth, A., Perkins, M. and Boucher, J. (2001). 'Here's the Weaver Looming up' Verbal Humour in a Woman with High-Functioning Autism. *Autism*, 5, 2, 111-125.
- Wing, L. (1996) THE AUTISTIC SPECTRUM: A guide for parents and professionals. Constable and Company Limited, London. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫監訳 (1998) 自閉症スペクトル 親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍 28-71.

注)

ミラー：ミラー(Mirror, 鏡映法)とは、主役(治療対象者)に観客となってもらい、場面ではAEが主役を鏡のように模倣して演じる援助の方法。AEが主役の代わりに演じ、その場面を観ることで、今まで気付かなかった自分に気付かせる技法である。

付記

本稿をまとめるにあたり、ご協力をいただきましたAさん、ならびに保護者の方に深く御礼申し上げます。

なお本研究は、東北大学教育ネットワークセンターコンサルテーション事業発達相談(事業代表者：田中真理)及び、科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究／課題番号 22653075／研究代表者：田中真理)の助成を受けた。